

研究集会開催報告書

自然科学研究機構
国立天文台長 殿

平成22年9月16日

(代表者)
所属・職名東北大学・教授

氏 名 山田亨



研究集会名	光学赤外線天文連絡会シンポジウム 第1部「中小口径望遠鏡によるサイエンスとその運用の将来」 第2部「データ解析の新展開:最先端とアーカイヴ活用」
開催期間	平成22年8月18日～20日
開催場所	国立天文台 三鷹
参加人数	約110名(各部約80名)
研究集会の概要	光学赤外線天文連絡会シンポジウムを2部構成で開催した。第1部では、岡山観測所を中心とした中小口径望遠鏡の将来計画の問題を取り上げた。第2部では、アーカイヴ利用促進やデータ解析技術に関する情報交換を目的とし、講演を主体としたシンポジウムを行った。 第1部(18日午後)は、国立天文台から岡山観測所の今後の運用方針(案)が出されたのを機に、急遽開催することとした。国立天文台による岡山観測所の将来計画、京都大学望遠鏡の現状や運営の見通し、大学間連携の経緯等についてそれぞれ報告があり、また、ユーザー側から共同利用時間の重要性等について意見があった。それらを踏まえて、岡山の将来や、今後の中小口径望遠鏡の運用について、参加者の間で議論を行った。 第2部(19、20日)は、大規模サーベイの現状と活用、アーカイヴ活用と多波長データベース、解析ツール、最先端のデータ解析と天文学という4分野で招待・一般講演を行った。最後に「大学における天文データ解析」をテーマとし、光赤天連による天文教育の支援に関して参加者からの意見収集を行った。

研究集会の成果	[第1部] 岡山観測所、京都大学望遠鏡や大学間連携の現状の把握と、中小口径望遠鏡の運用の将来に関するコミュニティの意見集約という、2つの大きな開催意義が達成されたと考える。特に、参加者による議論には1時間以上の時間を費やし、様々な意見を吸い上げることができた。議論の内容は直後の8月20日に行われた光赤外専門委員会にてさっそく取り上げられている。また、岡山観測所運用方針に関して、さらに幅広い立場からの意見集約を図りコミュニティからの提言をまとめるべきとの声を受け、天文学会秋季年会にて懇談会を開催することとなった。 [第2部] これまでの光赤天連シンポジウムでは、光赤外天文学におけるロードマップ作りといった、いわば枠組みの議論が主であった。それに対し、今年度の第2部は、プロジェクトの中で成果を確実に挙げていくため、研究者個人の実力を上げて全体のレベルアップを図ることを目的とし、データ解析という実用的なテーマを取り上げた。その結果、若い世代の講演、参加者が多く集まり、広範囲の話題の中から、普段の研究生活に役立つ情報が得られたとの声が聞かれた。また、国内機関においては欧米と比較してソフトウェアやアーカイブの整備が遅れている現状も垣間見え、課題を認識できたと言える。一方、進行中・近未来のプロジェクトについて、計画の状況や解析ツール整備等の報告があり、多数の参加者の興味を集めた。さらに、光赤天連による解析ハンドブック整備に関しては、シンポジウムで得た参加者からの意見を踏まえて進める旨を確認した。
その他参考 となる事項 (希望事項も含む)	